様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ１４２３８

研究課題名（和文）他国の語りに開かれた教育観を育成する社会科教員養成のデザインベースド・リサーチ

研究課題名（英文）Design-based Research for education pre-service teachers who are open to others' discourses

研究代表者
金　鍾成（Jongsung, Kim）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・助教

研究者番号：９０８２５８３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：他国の語りに開かれた教育観を育成する社会科教員養成のデザインベースド・リサーチである本研究の成果は以下の２点にまとめることができる。
①相互理解の主体による実際の対話である「真正な対話（authentic communication）」の概念を整理し、その概念を実現するためのザイン原則を明らかにした。
②「真正な対話」のデザイン原則にもとづき、日本と韓国の社会科教員志望学生による「より良いヒロシマ教科書」プロジェクトと日本と米国の子どもによる「より良いヒロシマ教科書」プロジェクトをデザイン・実施した。そのなかで、社会科教員志望学生と現職教員および子どもが何をどのように学んだかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自分がこれまで持っていた語りとは異なる他者の語りと出会った参加者らは、プロジェクトのなかで経験した認知的・感情的な負荷について告白した。しかしながら、その難しさにも関わらず、他者との出会いが社会を見る見方・考え方を広げたことはもちろん、社会の様々な他者とも対話していくことの重要性も同時に指摘した。社会的に構築された境界の下で幾重にも分断されてきた人々に話し合う機会を提供する真正な対話は、他者とともに生きる資質・能力・態度を育成することで、国内外を問わずより平和な世界の実現を目指す方法論として期待できる。

研究成果の概要（英文）：The outcome of this design-based research aiming to educate teachers who are open to others’ discourses can be summarized as follows:
(1) I could clarify the concept of “authentic communication,” which means the real communication between the agents of mutual understanding, and the design principles realize the communication.
(2) I could design and implement South Korean and Japanese social studies pre-service teachers’ “Make a Better Hiroshima Textbook” and American and Japanese students’ “Make a Better Hiroshima Textbook.” Also, I could clarify what and how the pre-service teachers, in-service teachers, and students learn during the project.

研究分野：社会科教育

キーワード：社会科教育　教師教育　国際理解教育　真正な対話　教科書　ヒロシマ　デザインベースド・リサーチ　相互理解

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）他国の語りに「閉ざされた」日本の社会科カリキュラム

グローバル化の急速な進展は日本のソトにいる他者との共存・相互理解を要請する。学校教育のなかでは，地域，国家，世界に貢献する市民の育成を教科目標として掲げている社会科が，その要請に対する主な責任を担ってきた（文部科学省，2018）。しかしながら，これまで出版された学習指導要領や教科書を見る限り，本当に社会科がその役割を果たしてきたのかに対する疑問が浮かび上がる。なぜなら，上述した日本の社会科カリキュラムが自国の語りのみにもとづいており， 日本のソトにいる他者の語りに閉ざされている傾向があるからだ（菅原・安田，2002；吉田，2017）。このような状況は，世界の他者との共存・相互理解どころか，それとは逆方向に向かっているようにも見える。

（２）他国の語りに「開かれた」社会科授業のための条件：他国の語りに「開かれた」教育観

米国の教育学者ソーントン（Thornton, 2004）は教師を門番（gatekeeper）に例える。氏は門番が誰を城門のなかに入れるかを決めるように，教師も学習指導要領や教科書などから何を授業に反映させるかを決めるゲートキーピング（gatekeeping）を行うと主張する。教師の能動的な授業デザインを強調するゲートキーピングの概念は，他国の語りに「閉ざされた」社会科カリキュラムを他国の語りに「開かれた」社会科授業に転換させる可能性を示唆する。なぜなら，ゲートキーピングの根幹になる教師の教育観が他国の語りに開かれている場合，他国の語りに閉ざされた社会科カリキュラムがそのままの形で授業という門を通り抜けることはできないからである。

（３）他国の語りに「開かれた」教育観を育成するカギとしての社会科教員養成

ホッキンソンとワイルド（Hodgkinson & Wild, 1994）は，教員志望学生と現職教員の認識調査の結果，教員養成段階が教育観の再構築に適切な時期であることを明らかにした。同じ文脈で，社会科教員養成段階も他国の語りに開かれた教育観を育成する適切な時期と言える。しかしながら，近年の社会科教員養成の調査研究では，これまでの日本の社会科教員養成プログラムが他国の語りをほとんど取り扱ってこなかったことが報告されている（渡部ら，2010）。このような社会科教員養成プログラムにおける他国の語りの失踪は，他国の語りに閉ざされた社会科カリキュラムがそのままの形で授業化される可能性が高める。

そこで，本研究は，社会科教員養成において他国の語りに開かれた教育観を育成するプロジェクトを開発・実施・省察・洗練するデザインベースド・リサーチを行う。特に，本研究は，プロジェクトだけではなく，プロジェクトの基盤となるデザイン原則，実際のデザイン・実施の過程，プロジェクトに参加した社会科教員志望学生の学びととその要因をともに共有することで，多くの教師教育者が自らの文脈において他国の語りに開かれた教育観を育成するプロジェクトをデザイン・実施できるように支援する。

２．研究の目的

本研究は，以下の２つの目的を掲げる。

①社会科教員養成において他国の語りに開かれた教育観を育成するプロジェクトをデザイン・実施・省察・洗練することで，社会科教員志望学生の教育観を他国の語りに開かれたものに変容させる。

②他国の語りに開かれた教育観を育成するプロジェクトをデザインするための原則，実際のデザイン・実施の過程，そこから得られる学びとその要因をともに共有することで，多くの教師教育者が自らの文脈において類似のプロジェクトをデザイン・実施できるように支援する。

上記の目的を達成するために，本研究では日本と他国の社会科教員志望学生がある社会的事象に対する考えを交え，互いが合意できる教科書をつくる「より良い教科書」プロジェクトとをデザイン・実施する。本プロジェクトの特徴として以下の２点があげられる。

（１）「真正な対話」論にもとづく社会科教員養成プロジェクト

社会科教員志望学生を他国の語りに出会わせるもっとも簡単な方法は，他国の語りを紹介し，自国と他国の語りを批判的に検討する機会を設けることである。そこから生まれる「自己内対話」は，自国の語りの相対化を促進し，広い視野から物事を考えることを可能にする（数土，2001）。しかしながら，相互理解という観点から考えると，他国の語りを紹介するだけでは不十分である。なぜなら，「相互」という単語が持つ両方向性を具現化するためには，自己内対話の結果を他者に伝え話し合う場，すなわち真の対話が必要であるからだ。

国際理解教育の文脈において，申請者は国と国の間に存在する対話の断絶をつなぐために，国内における自己内対話の結果を他国の他者に伝えあう「真正な対話（authentic communication）」を提案した（金，2016，2017，Kim, 2019）。「真正な対話」にもとづいて開発される「より良い教科書」プロジェクトは，他国の語りだけではなく，他国のなかに埋もれている他者を対話および相互理解の主体として位置付けることにその創造性がある。しかし，「真正な対話」は国境のソトにいる他者に限定されない。国家のウチにもさまざまな他者が存在し，国内の相互理解の主体同士の実際の対話も必要になってくる。このように「真正な対話」は国際理解教育の文脈だけ

ではなく，多文化共生教育，民主主義教育，市民性教育など，多様な教育の文脈でも活用できる方法論であることを記しておきたい。

（２）教科書の解体と再構築を図る社会科教員養成プロジェクト

多くの社会科教師にとって，教科書はバイブルのような存在である（山上，2010）。学習指導要領や教科書が他国の語りに閉ざされている現実を踏まえると，教科書そのものの認識を変えない限り他国の語りに開かれた社会科授業を実現することは難しいと考えられる。そこで，「より良い教科書」プロジェクトでは，「真正な対話」の媒体として教科書を用いる。すなわち，日本と他国の社会科教員志望学生が自国と他国の教科書記述を批判・吟味し，相手により良い教科書を提案し合うプロセスを採択する。このように教科書を解体・再構築する経験を提供し，社会科教員志望学生が教科書の構築性に気づかせることに，本プロジェクトの独自性がある。

３．研究の方法

（１）研究者の以前の取り組みの整理・再解釈および文献研究

私は 2015 年から，相互理解の当事者が実際に対話を行う「真正な対話」という概念にもとづき，日本と韓国の子どもによる「より良い教科書」プロジェクトをデザイン・実施してきた。その成果は以下の書籍としてまとめられている。

・Kim, J. (2019). Beyond national discourses: South Korean and Japanese students “make a better social studies textbook” In B. C. Rubin, E. B. Freedman, & J. Kim (Eds.), *Design research in social studies education: Critical lessons from an emerging field* (pp. 223-244). New York, NY: Routledge.

また，上述したもの以外にも，日本と米国の子どおよび社会科教員志望学生が「広島平和記念資料館の Last 10 Feet」を再デザインするプロジェクトをデザイン・実施するなど，他の形での「真正な対話」の場も設けてきた。その成果は以下の書籍としてまとめられている。

・Kim, J., & Kusahara, K. (2020). What is the lasting impact of the use of nuclear weapons during WWII in Japan? In a B. M. Maguth, & G. Wu. (Eds.), *Global learning based on the C3 Framework in the K-12 social studies classroom* (pp. 139-154). New York, NY: Routledge.

上記の先行研究から得られた「真正な対話」にもとづく教育的介入の成果および課題を整理・再解釈し，他国の語りに開かれた教育観を育成するプロジェクトのデザイン・実施に活用した。また，「真正な対話」の概念の理論的根拠をなしている批判的パトリオティズム（Banks, et al., 2003），批判理論（Habermas, 1991），対話的構築主義（桜井，2002）に関する文献を読みなおし，他国の語りに開かれた教育観を育成するプロジェクトに必要な理論を改めて構築した。

（２）デザインベースド・リサーチ

上述した先行研究の整理・再解釈した結果と文献研究の成果を踏まえて，社会科教員志望学生を対象とする「より良い教科書」プロジェクトをデザイン・実施した。具体的には， 研究者が米国の研究者らとともに編集した以下の本の成果をもとに，「実生活の環境における研究者と実践家のコラボレーションによる反復的な分析，デザイン，開発，実行を通して，教育実践を改善することと文脈的に敏感なデザイン原則や理論を導き出すことを目指す，システマティックであるが柔軟な研究方法論」（Wang & Hannafin, 2005, 6-7）であるデザインベースド・リサーチを行った。

・Rubin, B. C., Freedman, E. B., & Kim, J. (Eds.). (2019). *Design research in social studies education: Critical lessons from an emerging field*. New York, NY: Routledge.

まずは，諸理論から「真正な対話」を具現する際に必要なデザイン原則を抽出した。その後，抽出したデザイン原則に基づき，教育的介入としての「より良い教科書」プロジェクトをデザインした。その際に，デザインのプロセスをナラティブとしてまとめた。そうすることで，どのようにデザイン原則が教育的介入としてデザインされるかを共有し，類似の実践を試みようとする実践者が各自の文脈に合う形で教育的介入をデザインすることの支援を試みた。なお，「より良い教科書」プロジェクトの参加者が何をどのように学んだかを調査した。おもに，エッセー作成と半構造化インタビューを行い，教育的介入の成果と課題を調査した。その結果を踏まえて，「より良い教科書」プロジェクトをどのように洗練することができるか，またその根幹にあるデザイン原則をどのように洗練することができるかを継続的に省察した。

４．研究成果

（１）「真正な対話」のデザイン原則の抽出

これまでも他者の語りの内集団に持ち込み，「私たち」と「彼ら」の語りを比較・検討する実践は行われてきた。しかし，そのような実践は，内集団の議論が相互理解の主体である肝心な他者には伝わらない点に課題が残る。そこで，「真正な対話」は，「私たち」の議論結果を他者に伝え，また「彼ら」からも同じく議論の結果を伝えてもらう仕組みをつくる。そうすることで，相互理解の主体による実際の対話が成立する。以下は，「真正な対話」にもとづく教育的介入をデザインするための原則である。 批判的パトリオティズム（Banks, et al., 2003），批判理論（Habermas, 1991），対話的構築主義（桜井，2002）に加え，認知心理学の要素（Cooley, 1909/1956; Staub , 1997; Tajfel, & Turner, 1986; Williams, 1977）を考慮した原則となっている。

・自らの語りを可視化させた後に新たな語りの可能性を示唆することで，既存の認知枠組みを揺さぶる。
・子どもが自己と他者の語りを取り巻く（政治的な）文脈を捉えられるように支援する。また，それを分析・批判する機会を設ける。
・内集団の探究／話し合いの結果を外集団の構成員に伝える機会を設ける。また，意見の行き来がつづくように支援する。
・集団のナラティブを象徴し，かつ子どもに馴染みのあるものを対話の媒体を選定する。

（2）日本と韓国の社会科教員志望学生による「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクト

本プロジェクトは，2019 年の上半期に開設された日本の JP 大学と韓国 KR 大学の講義の一部としてデザイン・実施された。JP 大学の 20 人と KR 大学の 15 人の社会科教員志望学生は，日本と韓国の歴史教科書におけるヒロシマの語りを認識，分析，批判し，互いにより良いヒロシマ教科書を提案し合う真正な対話を行った。教科書には国家の公的記憶が直接に反映されており（Apple & Christian-Smith, 1992/2017），また子どもにとって親しみがあるため，今回のプロジェクトにおける真正な対話の媒体として選定した。また，教科書を正解が書かれている書籍として捉える日本と韓国の学校文化を考えると，本また，教科書を媒体として真正な対話を行うこと，すなわち自己と他者が教科書を解体・再構築する機会は，学習者を知識の「消費者」から「生産者」に位置づけなおす効果もある。

真正な対話は韓国の KR 大学から始まった。授業者である研究者は，日本の小学校六年生の教科書におけるヒロシマの記述を抜粋・翻訳し，KR 大学の学生に見せた。自分たちが知っていたヒロシマの語りとは異なる日本の教科書を見た韓国の学生は，違いから生じる違和感を吐露した。そこで，筆者が「それでは，みなさんが考える「より良い『ヒロシマ』教科書」を作成して日本の社会科教員志望学生に提案しましょう」と声をかけ，本格的なプロジェクトが始まった。KR 大学の学生は日韓両国の教科書のみならず，専門書などの諸資料を用いてヒロシマを取り巻く言説を認識，批判，分析し，その結果にもとづいて KR 大学版「より良い『ヒロシマ』教科書」を完成させて，日本へ送った。

研究者は KR 大学版教科書を翻訳し JP 大学の社会科教員志望学生に見せ，どのように思うかを尋ねた。言いたいことがたくさんあった日本の学生に「それでは，みなさんが考える「より良い『ヒロシマ』教科書」を作成して韓国の社会科教員志望学生に逆提案しましょう」と声をかけた。JP 大学の学生も韓国の学生と同様に両国のヒロシマの語りを熟知し批判的に検討したうえで，JP 大学版「より良い『ヒロシマ』教科書」をつくりあげ韓国の教員志望学生に逆提案した。

上述したように「（他者の語りを）知る→（他者の語りに内在されている観点を）認識する→分析・批判する→提案する」のプロセスの反復によって国境を超える公共圏が構築される。計二回の考えの行き来が行なわれるなかで，筆者は授業者として，同時に通訳・翻訳者として，対話のファシリテーターとしての役割を果たした。

ヒロシマを日韓の歴史的関係を軸に捉えようとする韓国の学生と，過去とは距離をおいて平和都市としてのヒロシマの普遍的な価値を信じる日本の学生との間には深い溝が存在していた。歴史の流れの中でヒロシマを取り上げようとする KR 大学の学生にとって，ヒロシマはヒロシマとして教えられるべきとする JP 大学の学生の取り組みは理解しがたいものであったようだ。結果的に両国の学生における語りのギャップは埋まっていかなかった。しかし，そのなかにも参加者には着実な学びがあった。プロジェクト後の感想文やインタビューにおいて，多数の学生が，他者の存在を実感したことや，難しいかもしれないが他者と対話し続けることの重要性を述べていた。また，対話が進むにつれて，参加者が教科書の構築性に気づき，能動的に対話に参加し，当事者性を持って自分事としてヒロシマを捉えるようになったことも，本プロジェクトの成果であると言える（金，2020，15-16）。

【学会発表・セミナー】

・Kim, J., Kusahara, K., & Nam, H. (2019, October). Creating cross-cultural discourses: Korean and Japanese pre-service teachers “Make a Better Hiroshima Textbook,” Presentation to the Conflict and Identity Conference 2019, Oxford, UK.
・丸山恭司・山名淳・Wigger, L.・金鍾成（2019 年，10 月）「Hiroshima という記憶の継承と和解：日独韓の声の交わりに見る表象の刷新」『教育哲学会第 62 回大会研究討議』広島大学。

【論文・書籍】

・金鍾成「他者の語りに開かれた市民を育てる—「広島平和記念資料館の『The last 10 feet』再デザイン」プロジェクトと「より良い『ヒロシマ』教科書づくり」プロジェクトを事例に—」『教育哲学研究』第 121 号, pp.10-16, 2020.
・Kim. J. (2020). Educating citizens who are open to the discourse of others: "The Last 10 Feet" Project and the "Making a Better Hiroshima Textbook" Project. *E-Journal of Philosophy of Education: International Yearbook of the Philosophy of Education Society of Japan, 5*, 42-51.（『教育哲学研究』第 121 号の英語版）
・金鍾成（2021，2 月）「日韓の社会科教員志望学生による 「より良いヒロシマ教科書づくりプロジェクト」」『2020 年度東アジア社会科教育シンポジウム（第 2 部）・広島大学教育ビジョン研究センター 第 23 回 研究拠点創成フォーラム』Zoom を活用した国際オンラインセミナー。（https://evri.hiroshima-u.ac.jp/15423）

（3）日本と米国の子どもによる「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクト

本プロジェクトは，ヒロシマに対する異なる記憶を有する日本と米国の子どもが，互いのヒロシマ言説をぶつけ合いながら相互理解を追求するプロセスであった（草原・金・小松，2020）。このプロジェクトでは，社会科教員志望学生の真正な対話を試みることではなく，子どもの真正な対話をファシリテーションする現職教員に着目した。日本と韓国の社会科教員志望学生による「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクトでは，私が研究者であると同時に実践者の役割を果たした。しかし，私が研究者と実践者の役割を兼任する体制のなかでは，私以外の他の実践者がどのようにデザイン原則を解釈し，各自の文脈で教育的介入をデザイン・実施するかが見えない課題があった。そこで，私は日本と米国の教員に依頼し，各国で「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクトをデザイン・実践してもらった。私は，両国の子どもの対話をつなぐ役割のみを担当した。

本プロジェクトでは，日本の広島県 JP 中学校１年生 39 人と米国カリフォルニア州の US 小学校 5 年生 30 人が参加した「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクトを事例し，上述した真正な対話と平和教育との関係について考える。日米の子どもがヒロシマを素材に話し合う機会を設けた理由は，ヒロシマが両国のナショナル・ナラティブを構成する重要な出来事であること，しかし，両国のヒロシマの語りにはかなりの非対称的性が見られることである（金，2020）。

実践終了後，日米の子どもに「プロジェクトをとおして学んだこと考えたこと，考え直したこと」に関するエッセーを書いてもらった。 コーディングした結果，①ヒロシマに関する新たな知識や視点の獲得，②自己のバイアスの気づき，③語りの違いを生み出す社会的背景の発見，④ヒロシマに関する諸概念（平和，正義など）の理解の深まり，⑤相互理解の仕方の理解と真正な対話の重要性の発見という５つの学びのコードが抽出された。ただし，米国の子どもからはコード②と④は現れなかった。子どものヒロシマに対する既有知や社会におけるヒロシマの位置づけの違いがその理由としてあげられる。

「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクトは，日米の子どもが他者の語りに開かれ，他者と対話しつづけることの重要性に気づくことを支援した。戦争や構造的暴力など，特定の非平和的な状況を設定しその克服を考える既存の日本の平和教育とは異なり，真正な対話は子どもに問題発見とその解決策の模索をゆだねる。教師側は安全な公共圏を創造すること，また自他の語りとその背景をバランスよく提供することに徹し，子ども自らが他者とともに生きるために何をどのようにすれば良いかを考えるように支援する。このように真正な対話は， 他者の語りに開かれた市民に必要な資質・能力・態度を育成するという点で，既存の日本の平和教育の目標論，またそれと連動する内容論・方法論・評価論に新たな視点を提供する。

最後に，各国の実践者は「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクトの教育的な目的を理解していたが，その具現の仕方はそれぞれ異なった。それに影響を及ぼした要因として，①実践者をとりまく社会的背景，②実践者の価値観，③各国の子どもの状況などが指摘できる。子どもと一緒に検討する事例や検討する方法などに見られた多様性は，教師のゲートキーピングの研究に発展できると考える。

【学会発表・セミナー】

・Kim, J., Kusahara, K., Valbuena, R., Tatara, Y., Kawaguchi, H., & Hoshi, M. (2020, December). Exploring Students' Historical Significance on the Use of the Atomic Bomb in Hiroshima During World War II: Students in Japan and U.S. Make a "Better Hiroshima Textbook." Presentation to the 100th NCSS International Assembly Conference, Washington D.C.

・金鍾成・草原和博（2020 年，12 月）「ヒロシマ教科書づくりの目標と日米共同展開」『広島大学教育ビジョン研究センター　第 60 回定例セミナー：広島叡智学園 HiGA の平和教育への挑戦（2）－日米の子どもによるヒロシマ教科書づくり－』 Zoom を活用したオンラインセミナー。（https://evri.hiroshima-u.ac.jp/14193）

・金鍾成（2021，6 月）「「真正な対話」にもとづく平和教育の可能性—日米の子どもによる「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクトを事例に—」『日本カリキュラム学会第 32 回大会シンポジウム』Zoom を活用したオンラインシンポジウム。

【論文・書籍】

・草原 和博・金鍾成・小松真理子（2020）「「より良い教科書づくり」プロジェクト—広島県立広島叡智学園の未来創造科との連携—」EVRI 研究プロジェクト叢書，第１巻。（https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/journal/BERP/1/--）

自分がこれまで持っていた語りとは異なる他者の語りと出会った参加者らは，プロジェクトのなかで経験した認知的・感情的な負荷について告白した。しかしながら，その難しさにも関わらず，他者との出会いが社会を見る見方・考え方を広げたことはもちろん，社会の様々な他者とも対話していくことの重要性も同時に指摘した。社会的に構築された境界の下で幾重にも分断されてきた人々に話し合う機会を提供する真正な対話は，他者とともに生きる資質・能力・態度を育成することで，国内外を問わずより平和な世界の実現を目指す方法論として期待できる。真正な対話を広げるためには，その場がデザイン・実践できる教師を育てることは欠かせない。今回のデザインベースド・リサーチは，その出発点であった。今後，すでに発表された研究成果や今後発表される研究成果を生かし，より大きな希望で他者の語りに開かれた教育観を有する教師を育成する教師教育システムについて考察していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 金鍾成	４．巻 121
２．論文標題 他者の語りに開かれた市民を育てる ―「広島平和記念資料館の『The last 10 feet』再デザイン」プロジェクトと「より良い『ヒロシマ』教科書づ くり」プロジェクトを事例に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育哲学研究	６．最初と最後の頁 12-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Jongsung Kim	４．巻 5
２．論文標題 Educating citizens who are open to the discourse of others: "The Last 10 Feet" Project and the "Making a Better Hiroshima Textbook" Project	５．発行年 2020年
３．雑誌名 E-Journal of Philosophy of Education: International Yearbook of the Philosophy of Education Society of Japan	６．最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 草原和博・金鍾成・小松真理子	４．巻 1
２．論文標題 「より良い教科書づくり」プロジェクトー広島県立広島叡智学園の未来創造科との連携―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 EVRI研究プロジェクト叢書	６．最初と最後の頁 1-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/49796	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Jongsung Kim, Kazuhiro Kusahara, & Hoyeop Nam
２．発表標題 Creating cross-cultural discourses: Korean and Japanese pre-service teachers “Make a Better Hiroshima Textbook”
３．学会等名 Conflict and Identity Conference 2019, Oxford, UK（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 金鍾成
２．発表標題 他者の語りに開かれた市民を育てるー「広島平和記念資料館の『The last 10 feet』再デザインー
３．学会等名 教育哲学会第62回大会、広島大学（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Jongsung Kim, Kazuhiro Kusahara, Rebeca Valbuena, Yuske Tatara, Hiromi Kawaguchi, & Mizuki Hoshi
２．発表標題 Exploring Students’ Historical Significance on the Use of the Atomic Bomb in Hiroshima During World War II: Students in Japan and U.S. Make a “Better Hiroshima Textbook”
３．学会等名 The 100th NCSS International Assembly Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 金鍾成・草原和博
２．発表標題 ヒロシマ教科書づくりの目標と日米共同展開
３．学会等名 広島大学教育ビジョン研究センター　第60回定例セミナー： 広島叡智学園HiGAの平和教育への挑戦（2）－日米の子どもによるヒロシマ教科書づくり－
４．発表年 2020年

１．発表者名 金鍾成
２．発表標題 日韓の社会科教員志望学生による 「より良いヒロシマ教科書づくりプロジェクト」
３．学会等名 2020 East Asian Social Studies Symposium（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 金鍾成
２．発表標題 「真正な対話」にもとづく平和教育の可能性―日米の子どもによる「より良いヒロシマ教科書づくり」プロジェクトを事例に―
３．学会等名 日本カリキュラム学会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

広島叡智学園HiGAの平和教育への挑戦（２）－日米の子どもによるヒロシマ教科書づくり－ https://evri.hiroshima-u.ac.jp/14193 2020 East Asian Social Studies Symposium Part 1 https://evri.hiroshima-u.ac.jp/15421 2020 East Asian Social Studies Symposium Part 2 https://evri.hiroshima-u.ac.jp/15423

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
2020 East Asian Social Studies Symposium	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Glendora School District, California	Hunter College	University of Houston Downtown	
韓国	ソウル教育大学			